方はないが、然し、それぢや些と……違ふだらうと思ひますねえ。

兼吉　（鎌首を上げて）へえゝ、何う違ひますね。

一重　（唾を飲み、靜かに）兼さん。お前さんとは昨今ながら、兎に角お前さんの氣性を知つてるつもりだが……むかつ腹立ちだけに、存外正直者のお前さんは知つてゐますが、さうお前さんのやうに　頭から嵩にかゝつて來られちや、お梅さんにしては何う取るだらう。人間にはこれで、僻みといふやつがありますからねえ。

兼吉　何んですつて。

一重　先方が今、困つてゐないのならいゝよ。二人は今あたしの家にも寄りつけないで、紺屋町あたりの煙草屋の二階に燻ぶつてゐなさるのだよ。

兼吉　へゝへゝゝ。若い男と煮凝つて……お樂しみでございますよ。へゝへゝゝ。

一重　先刻、兄さと云ふ方の口振りと云ひ、お前さんまで然う頭ごなしに叩きつけては、お梅さんの身になつても僻みも出やうさ。はゝあ、こりや寄つてたかつて自分を家へ入れたくないために。家や財産の登記面が、自分の名ではないだけに、こりや歸られては邪魔なのだらう、

旨く旦那に挺をかつて、醉月の家からわたしを遠ざける企みだと、ひよつとでもお思ひだつたら。お前さん方は何うするね。思はないよ、お梅さんは捌けた人だ、そんなことは思はないよ

ほゝほゝゝ。お梅さんは思はないだらうが……馬鹿な私などなら、さつきからの皆の樣子を、然う思ふかも知れないのだよ。いゝえさ、あたしならテツキリ然う僻むだらうと思ふのさ。

兼吉　（不快さうに）何う思はふと御勝手だ。兎に角、親旦那に御相談なさい。あつしや奉公人だ。

（と面膨らす）

一重　小兒ぢやあるまいし、私だつて足を運ぶのが、これで三度だ。高が奉公人のお前さんに、そんな大きな口を利かれるぐらゐなら、わたしも最うこの話に手を退きませうよ。

兼吉　何うなりと御勝手でさ。

一重　その代りわたしや歸ると同時に、此儘聞いた通りを、お梅さんへは通しますよ。好いかい。

好いね。あたしは生來、隱し事は大嫌ひなんだからねえ。

兼吉　何うか、そこんとこは、好しくお願ひ申します。

兼吉、太々しく空嘯きゐる。

一重　噂の通りだ。（兼吉を睨み、呟きつゝ立ち上る）はい、お邪魔様でございました。
千吉　（思はず乘り出して）あゝもし、お師匠さん。
一重　娘よりも御大切な奉公人。目をかけて、お使ひなさいまし。失禮しました。
　一重、不快さうに冷笑を漂はして、もの靜かに歸りゆく、千吉はホッと溜息して腕を組む
兼吉　（やゝ不安さうに擦り寄つて）旦那。貴方はお上さんを家へ入れたいんぢやありませんか。若しそれなら、何もあつしに遠慮はありませんぜ。
千吉　（苦笑）何を云ふのだ。そんなことしては山村の旦那に申譯が立たない。
兼吉　（不安さうに見て）然し……。
千吉　今となつてはこの家に、娘よりも大切なお前さんだ。何うかお梅から旦那の前をよしなに繕つて、諸事よろしく賴みます。年の加減か此頃ぢや、わしもめつきり我慢がなくなりましたよ。（寂しく笑ふ）
兼吉　（ぷんとせしが、二階に聲かける）おい〳〵座敷へ這入つぱなして何うしたんだ。座敷はいゝか、仕出し屋が遲いぢやねえか。床の間をよく見て置きなよ。
　兼吉、口やましく女中等を差圖しゐる時、小梅の旦那山村、案内もなく入り來る。當時流行の獵虎襟（ラッコ）つきの外套など着る。ほろ醉。
山村　どうだ。相變らず繁昌らしいな。前を通つたから寄つて見た。
兼吉　おや、入らつしやいまし。何方のお歸り。御機嫌でいらつしやいますね。おい〳〵。（二階に手を叩いて、女中を呼ぶ）旦那が入らしつたんだよ。みな下りて來ないか。
山村　（小梅の在否をたしかむるやうに、家内を見廻はしてから、坐る）父さん、何んですか。別にその……變る事もありませんかい。
千吉　（面目なげ俯向き）へえ。矢張り……相變らずでございます。
山村　兄さんは何うしたね。
千吉　へえ。あの馬鹿はまた炬燵にでも、どぶせつてゐると見えます。
山村　（何方つかずに）然うか……。困つたものだねえ。
千吉　へえ……。

女中等二人、二階を下り來る。坐つて山村に挨拶する。

山村　（臺所の用意を見て）兼吉。大一座でも受けたのか。

兼吉　へえ。例の銚子の醬油大盡でございます。藝者役者を引連れて、芝居くづれから奥の廣間で、初午祭といふ寸法になつて居ります。へえ。

山村　うむ。お前が芝居に居る頃、最負になつたと云ふ人だな。

兼吉　三四日もう、駄々羅遊びでございますよ。

山村　（意味ありげに笑つて）うむ、お前も醉月では、なくてはならぬ大事な人になつたのう、はゝゝゝ。結構だ。時にそんな鹽梅ぢや、私の座敷も塞がつて居るだらう。（と立上がる）

兼吉　へえ。相濟みませんが、これも商賣づくで……へゝへゝゝ。

山村　お前の事だ。負けて置かう。はゝゝゝ。表二階はあるだらう。

山村、兼吉を見て笑ひを洩しながら、二階へ上り行く。千吉、面目なげに俯向く。兼吉、女中等を叱りその案内をなさしむる。

軒に音して、小雨ハラ〳〵と降り來る。

小梅、肩のあたり少し雨に濡れて、廂合の露地を悄然として入り來る。わが家ながら闔高く、さすがに入りかねて、臺所の柱にもたれて立ちゐる。やゝ長き間、雨の音。

千吉　（ホツと溜息）兼吉どん。考へれば考へるほど……憎い娘だ、私は旦那の前に、顏が上げられませんよ。何うかお前さんから、よろしく願ひます。

兼吉　はゝはゝゝ。心得て居ります、好うがすよ。

千吉　あゝあ……。全く、憎い不孝者だ。

千吉、力なく立上りつゝ、そつと涙を拭ふ。兼吉、それを見て面白からぬ心持あり。小常磬（にときは）の半纏を着たる若者二人、仕出しの御膳籠をかついで臺所口に來る。小梅、その姿を見て横に隱れる。

出前持　へえ今晩は。小常磬でございます。

兼吉　おゝ、御苦勞々々。（と臺所に立ち出て）遲いぢやねえか、氣を揉ましたぜえ。構はず持込んでくんな。

出前持　へえ。

假名屋小梅

兼吉、手傳ふて料理の品を受取る間に、チラと小梅の姿を見つけて、むつとせる表情。わざと知らぬ振りにてゐる。

出前持、挨拶して歸りゆく。

兼吉、暫く小梅の方を睨みつけゐしが、やがて臺所の腰高障子をわざと音立てゝ、ピシヤリと閉める。

雨の音、ビシヤ〳〵と降り來る。

小梅（軒下に來り、間を置いて、小聲）兼吉、兼吉。私だよ……兼吉。

兼吉、答へず。帳場に坐りゐる千吉の傍に來り、小聲に何か囁く。

千吉　え、娘。——（吃驚して、立ち上がる）

千吉　あ、ちよいと……。（やゝ嶮しき目にて千吉を睨む）

千吉（その視線に氣がつき、紛らすやうに）何あに、たゞ……遂歸さうと思つたゞけさ。（外に聞かせる聲にて）旦那來てお出でなさる。あんな不貞腐れを、家になどに入れてなりますものか。（と澁々また坐る）

この時女中の聲、『兼吉どん、兼吉どん。』と梯子段の上り口にて、急がしく呼び立てる。兼吉、『はい、はい〳〵、只今……。』などそれに答へつゝも、千吉と小梅の素振りを怪しみて、立ちかねてゐる。

千吉（固くなり坐つて、獨語のやう呟く）わたしも富倉千吉だ。人に隱れて娘に會ふやうな……

……そんなさもしい氣は持ちませぬ。不幸者……！

兼吉、又はげしく呼ばれて、心を殘しつゝも二階へ上り行く。

雨の音。

小梅、臺所口の障子をホト〳〵と叩きつゝ兼吉を小聲に呼ぶ。

千吉、怺えかねて突と立ち上り、臺所の障子をガラリと開く。小梅、その機勢によろ〳〵と上り口によろけ入る。

千吉）言葉せはしく、キヨト〳〵して）何しに歸つた。何しに來た。何用あつて……歸つて來たのだ。（と激しく叱りつけ、又小聲）詫びか、詫びか、詫び言をしに歸つて來たのか。

小梅　お父さん……。（流石に萎れて）いつも〳〵……御苦勞をかけてすみません。

千吉　（手を振り、二階に氣をとられつゝ）馬鹿。俺の詫びなど、何うでもいゝ、旦那に、旦那にお詫びをしろ。（うろ〳〵しつつ、小梅を外に押し出しつゝ）一日も早いが好いぞ。遲くなるほど、こだはりが出來る。早く、直ぐ、早く直ぐ明日にも謝るんだぞ。みなお前が惡いのだ。たゞ、手をついて詫びれば好いのだ。一度で聞かなければ、二度、三度、幾度でも膝を折つてようく旦那に謝まるのだぞ。

小梅　旦那にも濟まない……。（溜息して）あゝ……濟みません。

千吉　分つたか。分つたら歸れ。人に見られるとお前の恥だ。（と無理に押出しつゝ、又考へて）然うだ。然う〳〵、旦那に詫びるならば、先づ人を賴んで第一に、兼吉のところへ詫びを入れるんだぞよ。

小梅　（聞咎めて）何んですつて、お父さん……？

千吉　旦那はこの頃、兼吉が無上にお氣に入りなのだ。又、兼吉とて、根からの根性曲りでもない。下手に出て、味方に賴めば、存外こつちの力になるやつだ。あれに憎まれてはお前の損だぞ。

小梅　（思はず、赫として）お父さん。

千吉　これ、聲が高い！

小梅　ぢやお父さんは、奉公人の兼吉に、そんなに迄も、小さくされてゐるんですか。

千吉　それもこれも、みなお前の身から出たことだ。

千吉、二階を恐れつゝ、無理に小梅を戸外へ出さうとする。

小梅　（身を振つて、父の手を退け）厭ですよ、お父さん、そんな馬鹿なこと……あたしは厭だ。なる程、私はみんなに心配かけて濟まなかつたとは思ふけれど、兼吉に手をついて謝まるなんて、何處の世界にそんな……。

千吉　こうれ、靜かにしないか、二階に聞える。

小梅　（屹と唇を嚙んで、暫く思案。決心）あたし。旦那に會はう。

小梅、づツと臺所に入る、千吉、狼狽してそれを止める。

千吉　これ、何處へ行く。

小梅　お父さん、なんぼあたしに落度があつても、兼吉に手をつくなんて、死んでも厭だ。打た

れやうが、蹴られやうが、あたしあ旦那の前に出て行つて、文句を云ふ、そんな義理知らずの奉公人はたつた今、あたしの見る前で、暇を出さして見せる。

千吉　これ、又腹を立てる、いまお前、山村さんの前へ出られる體か。

小梅　（鼻先に微笑）盜み泥棒をしたんぢやなし、高が、浮氣をしたゞけなんだ。人の弱味につけ込んで、のさばり返る義理知らず、そんな奉公人はは見たくもない。

千吉　（ウロ〳〵しつゝ）追ひ出すと云つたところで、兼吉はいま旦那の氣に入りだ。

小梅　だからさ。だからわたし旦那に會ひます。何んだ、旦那だつて、あんまり人を馬鹿にしやがる。そんな、そんな分らないやつがあるものか。それに……それに私は今日、是非なくて、ならないお金の用もあつて來たんだから。旦那に會つて出して貰ひます。此處にまとめて千兩あれば。濱本さんをアメリカへ洋行させる事が出來るんです、お父さん、何うか旦那に會はして下さいよ。

千吉　何、お梅。（意外の言葉に驚き）濱本に……お金だつて？

小梅　然かも、今日明日に迫つてゐるんです。この十六日の蒸氣船で、是非濱本さんをアメリカへ立てなければ、私の意地が立ちません。いゝえ、女の道……が立ちません。

千吉　（呆れて暫く小梅を見詰めゐしが、その襟頭をつかんで引倒す）お梅！

小梅　（不意に驚きつゝ）何ですよう。

千吉　（顫えつゝ）お梅。お前を子にもつて、今日の今日まで、お前の口から意地だ、張りだ、といふ言葉は、聞き飽きるほど聞いたが、女の道が立たないと云ふ……道と云ふ字は始めて聞いた。（と泣き）大恩ある山村様を踏みつけて、色男に金を貢ぐ……それが道か、それが女の道といふものなのか。

小梅　いゝえ、然うぢやない。貴方は何んにも知らないんだ。旦那はね、旦那はあれで物の底まで見える方なんです。話せばきつと、あたしの苦しい心持も分つてくれるに相違ありません。

千吉　これ、待て、お梅。（二階に行かんとする小梅を無理に引き止めて）お前、この上にも親を困らせる氣か。七太郎といひこのわしまで、今日安穩に世を送れるのは、これは誰方の御恩なのだ。

小梅　お父さん。貴方には話しても、細かいこゝろは分りませんよ。

千吉　これ、これ、待て。用があるなら兼吉に頼んで、兎に角、お前が顔を出しては……。（と縋り止むる）

小梅　放して下さい。痩せても枯れても、お梅はこの家の主なのだ。奏公人風情に踏みつけられて、旦那の前にも出られない……そんな馬鹿なやつがあるものか。旦那は話せば、きつと許してくれますよ。

小梅、振り放して行かんとする。千吉、無理に止むる。二三度揉み合ふ拍子に二人は足を辷して臺所の板の間に頽折れる。

小梅　（嚇として）お父さん。何うでも會してくれないんですか。

千吉　親を手にかけ、殺して行け。（顫ひ泣く）

小梅　ぢやお父さん、貴方は眞實こころから、わたしが濱本さんに惚れてると思ふのですか。（涙聲になつて）お父さん、然うぢやないよ……然うぢやない。（と激しく頭を振り）あたしはたゞ、意地が嵩じて、つい斯うした……深海に陷ちてしまつたのですよ。（と萎れる）

千吉　何を云やがる。お前の意地は聞き倦きた。

小梅　（じれつたさうに父の手を握つて）お父さん！

千吉　何んだ。

小梅　（凝つとその顏を見てホロリとなる）貴方には苦勞をかけました。來る年も〳〵……私は身持、浮氣沙汰で、苦勞ばかりかけて……濟みません。けれども、……今度ばかりは浮氣ぢやない。（固く父の手を握つて）浮氣ぢや……ありません。意地が嵩じてつい深海へ……身拔けが出來なくなつたんです。

千吉　何を吐かす。（と振り拂ふ）

小梅　年から云つたつて、弟のやうな濱本さん。私は決して、心から惚れてゐるのぢやありませんん

千吉　（苦々しげに首を振り）何……。何、何——

小梅　いゝえ、全く私は何んとも思つてはゐない。唯あの子供らしい、思ひ詰めると一心に……生命も投出して來る初心さに……つい絆されるとでも云ふものか、捨てるに捨てかねて、到頭こんなことに……なつたんです。

千吉　何い……？

小梅　ねえお父さん。私だつて、樽屋であのことがあつて以來、しみ〴〵と自分の一生も考へました。わたしの盛りも末の望も……、何時まで浮いて暮せるものぢやないと、骨身に染みて考へました。考へればこそ旦那に願つて、嫌ひな待合稼業まで、斯うして遣つて見る氣にもなつたのです。堅氣の人なら尼にもなる氣……、お父さん、全くあの時わたしが藝者を退くのは、ふつつりと世間も捨てゝ、生れ代つた女になるつもりだつたのです。

千吉　（膝を進め）それなれば何故。何故それならば……。

小梅、お父さん堪らねえ。一杯呑まして下さいな。

小梅、突と立つて酒樽の前に行く。呑口をひねる。

千吉　これ、お前は願酒だ。

小梅　お父様、今日だけは不動様も、大目に見て下さるだらう。（喉を鳴らして片口の酒を呑み）實は今だから云ひますけれど、旦那に願つてこの待合を出す前に、わたしは一二度……揶揄（からかひ）半分、濱午さんに會つてゐました。それがあたしの悪い癖……後悔しても追付きません。心を入れ換えて旦那に詫びると、旦那は機嫌よくこの家をわたしのために買つて下さいました。自分が身を立てるにつけても、濱本さんの身も立てゝ上げたい、旦那に願つて目的の金山とやらに、三萬か五萬の資本を出して頂き、それをもつて濱本さんとも別れて、相互に綺麗な身にならう……とあたしあの時、淺はかながら考へました。あゝこれまで濱本さんの目的を貫き、一生も立つと悦んで……旦那の前へ出る度に、幾度その御願ひがこゝまで出たか知れやしません。けれども旦那の前に出ると、舌がちゞかんで何うしても濱本さんのはの字さへ、口へ出しては云へないんです。假へからかひ半分にしろ。私はそれまで、一度でも二度でも濱本さんに逢つてゐるだけに、この口からは……出やアしません。えゝ何アに世間には幾らもあること、大腹中の旦那だ、後さへ愼んだらと、自分で自分の心を勵まして見ても矢張り、私には云へなかつた……旦那に嘘を吐けなかつた。

千吉　當り前よ。それが人間だ。

小梅　お父さん。私は先に一度、濱本さんの出端（でばな）を挫いてゐる人なんですよ。今度も自分の心を欺いて、一言旦那の前に嘘さへ吐けば、濱本さんの身も立ち自分の一生も救はれると、自分の

心を勵ましながらも、旦那の前に出ると……やつぱり駄目だ。

千吉　うむ。

小梅　（這ひ寄つて、指を見せ）お父さん、これで二度だ。……二度になります　（と萎れ）見かけた濱本さんの出世の蔓を、私ゆゑに切るのが……二度になります。濟まない……、濟まないと思ひました。その時次第、無考へ……後先なしにしたことが、斯うまで人に廻つて來るのが、恐ろしいやうな氣もします。まるで縺れた紙鳶の糸だ。こゝで切れば、そこで絡まる。そこを解けば、こゝで縺れるどこまで因縁を引くことやら……その濟まない、氣の毒と思ふこゝろが濱本さんの目にも映るし、形にも出て……餘計思ひを募らせるやうになりました。年は若し、女は初めて、夢中になるのも……無理はありません。今は鑛山も事業もないたゞ私から離れまい、嫌はれまいが一心で、見てゐても氣の毒なあせりやう……唯ウロ〳〵オド〳〵して、私の機嫌ばかり取つてゐます。私が逃げるか、捨てやしまいかと……夜も晝も私の見張り、顏も窶れ目ばかり光つて、この頃は……見ても氣の毒なやうな姿になりました。（耐らぬやうに、片口の酒をドク〳〵呑む）

千吉　（その手を掴んで）お梅！

小梅　（構はず飲む。舌など少し縺れつゝ）そればかりかこの中から、二人貸二階の三疊に鼻をつき合せてゐるうちにも、貧乏ゆゑあたしに……愛想を盡かされまいと思ふのでせう、大家に生れて本の一つも讀んだ身で……そつと私に隱れては小錢をつかみ出し、蠣殼町あたりの合百とやらで……一錢相場をはつて見たり、舊い友達を尋ねて時計や書物を借り出し、それを曲げて二圓でも三圓でも、出來たゞけ、私を悅ばせやうと苦勞します。その心もちのさもしさいぢらしさ……見てゐる私には耐りません。つい此頃もたつた一枚の更紗紬の下着を屑屋に賣つて、わたしに竹葉を食べろと云ひます。お父さん、その鰻が食べられますか、喉につかへて……通りますか、（グツと酒を呑み）打遣つて置けばあの人は、私の爲めに……今に小泥棒もしかねません。手をうしろに縛られるやうな事も……きつとするに相違ない。それが氣の毒、胸が痛んで……わたしは默つて見てはゐられません。何んとかして旅費こしらへ、ようく因果を含めた上で、アメリカへでも洋行させる外、あの人を救ふ道はありません。

小梅の言語、酒の醉と共に次第に感傷的になる。流るゝ涙をたのしむものゝの如く、

次第にわが悲哀を唄ふやうな調子となる。

この時、突然格子戸の外に訪なふ荒らかなる聲。聞ゆる。

千吉　（喫驚して耳を立て、手で抑へで）待て。誰か來たやうだ。

小梅　ねえ、お父さん。わたしは今度こそ眞劍の話、人を一人救ひ上げるためなんです。どうか旦那に願つて、洋行の旅費を千圓だけ――

千吉　待てよ。待て。（不安さうに、格子の外に）誰方？　誰方でございます。

濱本　僕だ。濱本だ。（と叫んで、格子戸ガラリと開く）

千吉、小梅、はつとして顏を見合はす。小梅、何か考へて自身に出て行かんとするを千吉、狼狽して取り抑へる。

千吉　濱……濱本さん？　ついぞ、伺つたことのないお名前ですが、何か御用でも……。（油斷なく耳を立てる）

濱本　（蔭の聲）その用は此方にあるんだ。（と入り來る）

千吉、厭がる小梅を無理に酒樽のうしろに忍ばせ、濱本の前に來りて立ち塞がる。

千吉　何んだ……何んです。人の家にことはりもなく……

濱本　何い！（血走りたる目にて、暫く千吉を睨みつけしが、やがてドカリと胡坐を組み）お梅が居ませう。會はして下さい。

千吉　（その劍幕に怯みつゝ）お梅は、お梅は……お前さん。

濱本　隱しても駄目だ。僕がちよツと錢湯へ出た後、拔け出したのは遁げたんだ。この家へ歸つて來たに相違ない。（と家内を睨め廻はす）

千吉　飛んでも……飛んでもない事だ。お梅はうちを家出して、もうお前さん半月以上も……

濱本　歸らなかつたは分つてるが、今夜は確かに歸つて來た。家中家捜ししても連れて行く。

兼吉、何氣なく二階の梯子段を降りて來る。樣子を立聞く。この時又、前の出前持二人、後追ひの仕出し料理を擔ぎこんで、臺所口に來る。

千吉　（遠くより）お前さん。そんな亂暴なことを云つたつて……

濱本　死ぬか生きるか、こつちも覺悟して來たんだ。惡く隱すと家内中、その儘には置かないぞ。

兼吉　（上り段を出つゝ）お父さん。何んです、こいつは。

千吉、目くばせして兼吉に相手になるなと叱る。

濱本　さ、お梅に會はう。お梅、お梅。何處へ隱れたお梅、家捜しゝても連れて行くぞ。お梅、お梅。（大聲に叫びつゝ、立上る）

兼吉　ふざけやがつて、何をしやがる。

濱本　何――？

兼吉、相手の濱本たるに心付いて、取抑へんとするを濱本、睨む。

出前持二人、屋内の騷ぎに好奇心を催し、御膳籠をそこに置いて、ソロ〳〵と臺所へ上り來る。

小梅、出るにも出られず、目をつぶつて殘れる片口の酒をグイと呷りつける。

兼吉　（濱本の氣相に少し痺みつゝ）何とは何んだ。商賣屋へ來て何の眞似だ。しやら臭い眞似をすると、その分には置かねえぞ。

濱本　元より覺悟だ。女が逃げりや、ぶつたぎる。おれも死んだら文句はあるめえ。

濱本、懷中に用意し來れる手拭づゝみの出齒庖丁をグル〳〵とほどいて、そこに投げ出す。一同ギョッとする。

注意。濱本の語調その境遇につれて、前場の彼とは別人の如く、卷舌にて遊人などの態度あり。

濱本　（はずむ呼吸を無理に落着けつゝ）何も、おれは、この家を騷がしたんぢやない。お梅さへ返してくれゝば、引上げる。お梅はおれの妻だ。女房だ。（又立ちかけに、涙聲）お梅、お梅……お梅。

兼吉　（相手の樣子を見て、わざと柔かに出て）ぢや何んですか。お上さんさへお前さんに渡せば、お前さんは何も文句はありませんね。

濱本　勿論だ。おれはこの家に用があるのぢやねえ。お梅に用があるのだ。（と立つて、二階の方へ行き）お梅、お梅。何處へ隱れた、お梅。

濱本、緣側に出んとするところを、兼吉、その油斷を見すまして、突然背後より『この野郎』と組み付く。出前持等もその樣子をさとりて、兼吉に加勢して激しく格闘す。

兼吉　（大息になつて、濱本に組みつき、足にて庖丁を除けつゝ）旦那々々、早く、その證據、品

出齒庖丁を隱して下せえ。それを證據に屯所に突出すと、こいつは持兇器脅迫罪で十年ぐらゐは食ひ込むんだ。證據品を早く……早く〳〵。

千吉、庖丁を取上げしか、その置場に困りてマゴ〳〵する時、小梅、横合より來りて突と父の手より庖丁を奪ふ。自分の帶の間に挾みて、その場を遁れ去らんとす。

千吉狼狽しつつも小梅を引止める。縋り止むる。

濱本、組まれながらも小梅の姿を見つくる。

濱本　おゝ、お梅……。（夢中になりて躍りかゝらんとす）

兼吉　何をしやがる。畜生！

濱本　（蹉詑（ちしつ）しつゝ）お梅、お梅。何故遁げるんだ。別れてはおれ、生きてゐないぞ。僕、これから働く、稼ぐ。泥棒しても、お前一人を不自由させない。何うか、どうか一緒に歸つてくれ。賴む、お梅、お梅さん、一緒に歸つて下さい。

小梅、臺所に立ち竦み、わが足元を見詰めて、無言、佇立するのみ。

千吉　これお前さん、何を云ふ。（兩手に濱本を制しつゝ）二階には旦那も來てお出でなさる。まだお詑びも濟まないお梅だ。どうか、大きな聲はして下さるな。假へ內緣でも、お梅は主あるの體なのだ。旦那に聞へては大變だ。

濱本　いや、假へ旦那があつても、お梅はおれの女房だ。僕のものだ。お梅に別れては、僕一日も生きて居られない。（涙の聲を搾つて）お梅さん、貴方は僕を捨てる氣でも、僕は、僕は決して、別れませんよ。ねえお梅さん。僕も男だ。假へどんな事があつても、貴方は立派に暮らさせます。ねえお梅さん、約束したねえ、僕と約束したでせう。ねえお梅さん、僕、この通り手をついてゐる。頭を下げる。ねえ、一緒に歸つて下さい。

兼吉、出前持二人の力に捩ぢ伏せられながら、濱本、足をバタ〳〵して疊を蹴りつゝ哀願する。

小梅、無言、俯向いて立つ。

兼吉　えゝ、何を吠えやがるんだ。色氣違ひ！

兼吉、厭々しげに濱本を蹴る。

濱本　（嚇として）畜生、貴樣おれを蹴つたな。（組み伏せられつゝ血走つたる目に睨む）

兼吉　當り前よ。手前のやうな氣違ひは、然うして正氣をつけるんだ。

兼吉、口惜しまぎれに濱本を散々に打つ、蹴る。小梅、見かねで兼吉をとゞめんとす。

千吉、小梅の手を摑んで放さず。

千吉　これお梅。お前はまだ旦那にお詫びのすまない體だ。家のこの騒動も、みなお前の身から起つたのだ。さ、出て行け、出て行つてくれ。一刻でもお前を家へ入れては、わしが旦那に濟まない。お前も今、この濱本さんに未練はないと云つたではないか。未練がなければないやうに、また方法があるだらう。な、お前のためだ、出て行け、出て行け、出て行つてくれよ。

千吉、意味ありげに小梅に目くばせして、臺所口より小梅を押し出す。小梅、何か云はんとして云ひ得ず、小雨のなかを悄然として出て行く。

濱本　（聲を搾つて）お梅さん。それぢや僕を捨てるのか。僕をそれぢや、僕を捨てるんですか。

兼吉　何を畜生、うぬ、うぬ。

濱本　お梅さん、お梅さん……お梅さん。

濱本、絶叫して撥ね起きんとするを、三人にて抑へる。

小梅　千吉に唆かれて出て行く時、二階の山村は梯子段を下りかけてこの光景を凝つと眺めゐる。

雨、降る。

——幕——

第四幕　濱町河岸

大河の夜景を見せる背景。對岸には燈影うつりて、やゝ夜は深けたり。枯柳一二本立ち、下手の方に小橋あり。捨石、電柱などを見る。

小雨やゝ晴れて、周圍は蒼白き霧に包まる。前幕より三十分ほどの後。

幕明く。客待の老車夫一人、提灯を胯火にて乘客を待つ。小梅、小橋の袂に佇み、悄然として水の流れを見る。遠く清元（比翼塚など）の三味線聞えて、辻占賣の聲寂し。

通行人二三人、通り過ぎる。

小梅　あゝ……。（ホッと嘆息）

車夫　お上さん。御都合で參りませうか。今夜はあぶれて蠟燭代にもなりません。何うか乘つて

やつておくんなさい。

小梅、無言。人なき方へ避けて、又河の水を見る。

車夫　ねえ、お上さん、人助けだと思つて、何うか、召して下さいましよ。お代のところは申しません。

小梅　……（煩さゝうに又歩く）

車夫　お上さん、お上さん。（と傍へ來り顏を見て）おやこれは、醉月のお上さんぢやございませんか。今時分、何うなさいました。

小梅　（初めて氣がつき）お前さん。私を知つてゐるのかい。

車夫　へえ、毎日この河岸へ出張つてゐますから、お顏はよく存じて居ります。

小梅　お前さん。ちよつとね、私の家まで使に行つておくれでないか。

車夫　へえ？

小梅　うちの兼吉にね――知つてゐるだらう。ちよつと兼吉に、こゝまで來てくれるやうに、お前さん呼出しをかけておくれでないか。

車夫　へえ、好うがす。途中然う申して行きませう。

小梅　あたしの名を云つちや可けないよ。たゞ何んとなく、兼吉を呼び出しておくれよ。（若干の賃錢を與へる）

車夫　へえ畏りました。有りがたうございます。

車夫、空車を引いて去る。清元の聲。辻占賣の娘、お袖通りかゝる。

お袖　お上さん、お上さん、辻占を買つておくんなさい。

小梅　……。

お袖　ねえ、お上さん。この雨で商ひがなくつて、家へ歸れないのだから、一錢買つておくれよう。

小梅　え、家へ歸れない……？

小梅、氣がついて辻占賣を見る。十二三のいたいげな小娘なり。小梅、巾着より小錢を出し與へて、辻占の一片を取る。讀む。

辻占賣、よろこびて去る。

假名屋小梅

小梅、橋の欄干にもたれて、又聞くともなく清元に聞き恍れゐる。

兼吉、醉月と大書せる番傘を肩に、腰端折、高足駄にて來る。

兼吉　（傘の外に手を出し）何アんだ、雨はいつの間にか上つてけつかる。（と呟きつゝ傘をたゝみ、小橋の邊を透して、そして、もしわたくしに急用と仰しやるのは誰方でございます。もし、兼吉でございます。（暗闇に寄つて來て）おゝお前さん、お上さんぢやあねえか。

小梅　兼吉。そしてうちの様子は、何うなつたい。

兼吉　お上さん。ぢやそれが心配で、わざ〳〵俺等を呼出したのかい。（と面白からぬ顏をする）

小梅　だつて、家を出ても、後が氣になるぢやないか。

兼吉　書生ツぽね、引括つて置きましたよ。警察へ突き出すまでのことさ。

小梅　お前そんなことをして、何うする氣なんだ。

兼吉　俺等がすることだよ。お前さんの差圖はうけねえ。

小梅　（むつとしたが）然うか。それぢや兎に角、あたしが家へ歸らう。

兼吉　（番傘にて小梅を支へ）ちよいと、何處へ行くんだ。

小梅　何處へ行くもんか。わがうちへ歸るんさ。

兼吉　お前さんの家？　お前さん、歸れる氣かい。

小梅　自分の家へ歸るのに、誰が何んで不思議なのさ。

兼吉　おい。冗談云つちや可けねえ。お前さんは今、家から突き出されて來た人だよ。

小梅　お父さんは昔氣質。旦那への義理を立ててゐるんだらうが、何、わたしが話せば旦那は分かるよ。

兼吉　お上さん。詰らねえこと云つちやいけねえ、旦那も今度ばかりは、眞底から怒つてゐるんだ。いつもの傳では行くまいよ。

小梅　大丈夫。お前は知らないよ。（輕く受けて、行きかゝる）

兼吉　（むつとして、小梅の前に立ち）お上さん！

小梅　何をするんだよ。あのまゝ捨てゝ置いては、濱本さんの一生にもかゝはるぢやないか。旦那に話して、道を立てるんだよ。

兼吉　何、濱本だ？　へん、箆棒め。あの青二才の始末なら誰が承知したつてこの兼吉が納まら

ねえ。爲るだけの始末はおれが爲る。

小梅　（嚇として）兼吉！

兼吉　（太々しく、小梅を見る）何んでえ。

小梅　（息を嚥みて、靜かに）人の噂だ、まさかと思つてゐたが、お前今頃になつて、のさばり返るのぢやあるまいね。

兼吉　のさばる……？

兼吉　津の國屋の家を追ひ出された時、引取つて、今日まで世話をしたのは誰なんだ、世間樣に聞かれると、お前恩知らずと云はれるよ。

兼吉　恩知らず？　へん、一度云はれて見てえねえ。が、然う云ふお前さんは、それでも旦那の恩を知つてるのか。笑はせるたあ、ほんにこの事だ。はゝはゝ。

小梅　何？

兼吉　何んでえ。

兼吉、憎々しく唇を飜へす。小梅、ムラ〳〵とせしが、強いてまた氣を鎭める。

小梅　それもこれも、みんな私が惡いんだよ。だが、一圖に思ひ詰める若氣から、カツと取逆せてした事だ。何うか今日のことは、穩便に計らつておくれでないかね。

兼吉　厭だね。太え畜類だ。懲らしめのためにも五年か十年拜ませないぢや、この後どこまで附纏いやがるか知れたものぢやねえ。誰が何んて云つても、おらあ許せねえ。

小梅　兼吉、お前なぜ一國なんだよ。若い人だよ。今そんな事があつては、一生のしんが止まるぢやないか。高いも低いも人の一生だ、そんな慘らしいこと云ふもんぢやない。濱本さんはね、わたし故に二度までも、事に挫げてゐる人だよ。この上一生のしんを止めては……。

兼吉　（惡意ある冷笑）お上さん、おまいさんまだあの若僧に、未練があると見えすまね。

小梅　未練や何かで云ふのぢやないよ、人間一人の一生だよ。（じれつたさうに）兼吉、ようく思つても御覽。人一代の出世の蔓をとめて、それで寢覺めのよいといふものではないえね。兼吉私もこれからはお前の下地について、我儘もつゝしむとしよう。旦那にも心配をかけないやうにするから、何うか濱本さんの身に、間違ひのないやうにしておくれ。あの人は先に望のある體、又家も再興しなければならない人だ。こゝはお前の口一つで、生きもする、死にもするの

だ。ねえ頼むよ兼吉。何うか穩便にことを計らつておくれよ。

兼吉　（ニヤ〳〵笑ひながら、嘲弄的に）お上さん。

小梅　え。

兼吉　お前さん、私に頼むのかい。手を突いてまで濱本のことを、この兼吉にお頼みなさるんだね。はゝはゝ。が、私や奉公人だよ。お前さんは御主人様だよ。

小梅　えゝ。

兼吉　さつきお前さんは何んと云つた。死んでも兼吉づらの世話はうけねえ、頼むものかと、蛆虫か何んぞのやう、立派な口をきいてゐたぢやねえか。

小梅　……（唇を嚙む）

兼吉　へん。うぬの困る時ばかり、拜む頼むか。餘り馬鹿にしなさんな。兼吉にだつて、五分の虫があるのだ。

小梅　兼吉、お前何を聞いたか知らないけれど、それはわたしにも……云ひ過ぎがある。たゞこゝは、人間一人生き死にの場合だから、ようく料簡をしておくれ。お前は今カツとしておゐ

でだけれど、明日の日になつて考へると、きつと好い心持に相違ない、ねえ兼吉。

兼吉　お上さん。ちツと呢（こゝ）かアありませんかね。

小梅　だつてお前——。

兼吉　厭だつたら、厭なんだ。兼吉は今日ちと、虫の居所が悪いんだ。云ふだけ無駄だ。あばよ。

兼吉、せゝら笑つて行きかける。小梅、急いでその番傘をつかむ。

小梅　これ、兼吉！

兼吉　何んだい。

小梅　お前はわたしに、これ程頭を下げさせて、それでも頼みは聞かれないのかい。主人だよ、主だよ、兼吉。

兼吉　何んだ〳〵、そのラツは何んでえ。あんな青二才と乳繰り合やがつて、手前の困る時だけ拜むの頼むの。へん、大抵外聞もあつたもんだ。

小梅　何んだつて。

兼吉　お上さん、おいらだつて濱本の話を聞いて、あんまり好い心持はしねえのよ。（厭味らし

く傍に寄り）それ、何時か、あの時おれを……お前さん、何う扱ひなすつたえ。へゝへゝゝ
（口に唾がたまるやうに笑つて）忘れたか、お前あの時……おいらの横ツつぽをはり倒しやがつたぜ。これは飛んだ貞女様だと後ずさり――まるで川柳點の文句通り、兼吉は器量を下げて引き退つたのだ。

小梅　（その厭味を怺へつゝ）それもあたしが悪るかつた。けれども、その事は……兎に角、あたしが謝まるとして、當座に迫つてゐる濱本さんのことだけは……。

兼吉　（憎悪に燃えたる視線）ふゝ、又濱本か。

小梅　けれどもお前……。

兼吉　（顯を突き出しつゝ、憎々しく）濱本さんか。

小梅　え……。

兼吉　濱本さんか。……へゝへゝゝ。又、濱本さんか。

小梅　え……。

兼吉の視線に射られて、小梅、思はず一歩づゝ退く。

兼吉　ふゝ、業曝しめ！

兼吉、憎悪に耐えぬものゝ如く、持てる雨傘にて小梅の横顔を撲りつける。

小梅　（屹つと向つて）兼吉！

兼吉　何んだ。

小梅　お前、手を上げたな。主人のわたしを……好くも打つたな。

兼吉　打つた。あの時の返禮だ。

小梅　何――

兼吉　（小梅が帶に挾める出齒庖丁を見つけ）おゝ、持つてるな。大事な證據だ、寄來せ、寄來せ。その證據のあるとないでは、野郎の年季に大變な違ひだ。返してくれ、寄來せ。

小梅、初めて持てる庖丁に氣がつき、渡さじとして遁げる。兼吉、それを追ふ。どゞ、小梅を羽交締めにして兇器を奪ひ取らんとす。

小梅　兼吉、兼吉、これだけは……この出齒だけは……。（身をもがいて爭ふ）

兼吉　畜生！　まだ書生ツぽを屁やアがるか。

小梅　あれ、兼吉……

兼吉　畜生……

小梅、兼吉の暴力に敵しかねて、橋上より庖丁を河の中に投げ入れんとする。兼吉、それをさまたぐる。

小梅、決心、出齒庖丁にて兼吉の痺腹を突く。兼吉あつと叫んで倒れる。

雨あがりの月、出づ。

（道具、廻る）

【附記】演出者の都合にもよることなれど、この一場濱町河岸の場は、前後の演出と調子を異にするも差支なきゆゑ、なるべく昔風に、舊劇らしく、假名垣翁の醉月紀聞などを思はしむる演劇として上演する方よろしからんと思ふなり。作者はその用意にて書きたり。

同　濱町の待合醉月

第三幕と同じ道具。たゞ時刻はその時より一時間ほどの後。

山村善兵衛、上座に坐り、濱本は遠くはなれて、泣きながら俯向きゐる。千吉もゐる

千吉　（濱本の側に寄りて、親切に）ねえ、お前さん。今旦那の仰しやつたお言葉、貴方は何うお聞きなさいました。千圓といふ洋行費まで出して、貴方の一生を立てゝ下さらうと云ふ山村の旦那の廣いお心を貴方は何うしてお受けなさる氣ですか。

濱本　（兩手で膝頭を摑んで）濟みません、濟みません。

千吉　娘のことはふつつり忘れて下さいますね。あんな馬鹿者のことは思ひ切つて、これから大事の貴方の一生を、必ず立てて下さいますね。

濱本　夜が……夜が明けたやうです。有難う。骨身に染みてこの御恩は忘れません。山村さん。
有難うございます。
山村　ははゝはゝゝ。もう好し〳〵、濱本さん、これで貴方も、一修業積んだといふものだ。ア
メリカへ行つたら、一心不亂に勉強して下さい。何しろ年が若いんだ。奮發はこれからさ。は
ゝはゝゝ。
濱本　有難うございます。きつと成功して、此の御恩に酬ゆる時が、必ずあると信じて居ります
山村　はゝはゝゝ。あんたも實に感情家だねえ。はゝはゝゝ。
宇治一重、使をうけて驚き、急ぎて入り來る。
千吉　おゝ、師匠よくまあ來て下すつた。
一重　（山村に目禮しつゝ）お梅さんの話を聞いて、若しやと思つてこちらへ參ります途中、こち
らのお清さんに逢つて、濱本さんのことを聞きびつくらして飛んで來たんですが、濱本さん、
貴方まア何んと云ふ亂暴をなさるんです。
山村　あ、師匠。その話ならもうない事になつたのだ。私からよくお話をするとな、濱本さんも潔

白に聞き入れて下すつてな、明後日の外國船で洋行なさる氣になつたのだ。空晴れて月出づ。
もう舊い事は、總て無い〳〵。はゝはゝゝ。
一重　然やうでございますか。何時もながら山村さんの、人を殺さぬお計らひには、たゞ〳〵頭
が下がります。有難うございます。
濱本　（頭を上げて）師匠。
一重　はい。
濱本　貴方にもいろ〳〵、御心配をかけて濟みません。今は何も云ひません。一生を見て下さい
僕は必ず、自分の終生を賭けて、みな樣にこのお詫を致します。
一重　好く仰しやりました。それで貴方の姉さんへ、顏が向けられます。
山村　はゝはゝゝ。もう好い、もう好い。然うと話が極まれば、次にはお梅だ。誰か使の者に探
させて、お梅も家へ入れた上に、一同揃つて氣持よく飲んで別れることにしよう。濱本君の送
別會だ。
濱本　あ、山村さん。お言葉でございますが、わたしはこの儘、お梅に會はずに……直ぐこれか

ら出發したいと思ひます。

山村　何うして。

濱本　決心はついて居ります。固く決心はして居りますが……、僕もう何人にも……顏を合はせたくありません。進んで人に會うのは、三年か……五年の後、せめて人間らしくなつてからにしたいと思ひます。

一重　（膝を叩いて）なる程、そこだ。では直ぐ、お立ちなさい。

山村　然うか、なる程それも好からう。君の隨意にまかせます。

濱本　では、皆さん御壯健で……。（一同に挨拶して、旅費を納め）山村先生、御機嫌よろしう。師匠、達者でね。

一重　三年が五年でも、濱本さん、待つてますよ、お立派なお姿を見せて下さいよ。（と涙を拭ふ）

濱本　有難う。では然やうなら。

濱本、一同に禮して欣然として去る。一重、千吉、襖の外まで送り出す。

外に夜廻りの拍子木の音、聞え來る。

山村　（濱本を送り出して、二階に歩みながら）さ、それぢや師匠。

一重　はい。今ちよツと……後から直ぐ、御邪魔に出ます。

山村　久し振りだ、今日は一つ聞かせてもらひたい。

一重　（浮々して）好ござんすとも、今日は遣りますよ。

山村　おい、兼吉、兼吉。（と臺所に聲かけしが、氣がついて）あゝ居なかつたのか。

山村、二階へ上り行く。千吉と一重。舞臺に殘る。

千吉　師匠。いろ〳〵御心配をかけて相濟みません。お蔭様で、重荷を下したやうな心持でございますよ。

一重　いゝえ、わたくしなんか却つて……けれども、總てが無事に濟んでこんな結構なことはございません。目出度し。目出度し、これで大團圓と致しませう。ほゝほゝゝ。

千吉　然し、何んの中でも禮は禮。お梅を家へ入れるとすれば、是非貴方から山村の旦那に、一應あれのお詫を入れて頂きたいと存じます。

一重　は、好ござんす。旦那の方はもう分つてゐらつしやるのだから、何んの心配もありません

千吉　あゝあ。本當に今度は、壽命を縮めましたよ、はゝはゝ。

一重　本當にお察し申します。

小梅、疲れはてたる人のやう、フラ〳〵として足も地につかず、蹌きつゝ格子口より入り來る。右の袖は肩の邊まで綻びて、手先にからまり、裾のあたり泥に濡れたり。

小梅　何んだか、馬鹿に草臥れちやつたい。（境襖に兩手にてつかまり、グツタリとなる）

一重　（びつくりして見上げ）おや、お梅さん。

千吉、一重、不審さうに小梅の姿を見る。

小梅　（舌に縺れるやうな聲）何んだか……自分の身體のやうぢやない。

小梅、襖の手を放すと、宙を泳ぐやうにして五六歩、爪先にて歩んで、帳場格子の前にベタ〳〵とへたばる。

一重　何うしたの、小梅さん。（怪しみて側に寄る）

小梅　自分でも、何んだか……分んなくなつちやつた。急にクラ〳〵と……酒の醉が發したやうだ。

小梅、肱を枕にしてコロリとそこに寢やうとする。

千吉　（その無作法を見かねて）これ、お梅。

一重　今日はまあ、お父さん。

一重、目くばせして千吉を制しつゝ、小梅の樣子を訝かしげに見詰めゐる。

小梅　（又顏を上げて）喉が乾いちやつた。何か頂戴。

一重　お冷？　はい〳〵。（と立つて臺所の方へ行く）

千吉　（フラ〳〵として眠らんとする娘を搖り起し）これ、旦那が二階にゐらつしやるのだよ。

小梅　え、旦那――。（ボンヤリして遠きものでも眺めるやうに、父の顏を見てゐる）

千吉　（耳に口添せて）話がついたのだ。師匠に賴むのだぞ。

一重、冷水を持ちて來る。

一重　はい、お冷。

小梅　（コツプを受取り。グツと一口飲んで）水ぢやないの、それぢや……水盃だ。

一重　えゝ。（と見詰める）

小梅　あたしね、實は人を殺して來ちやつたの。お師匠さん、あたし到頭遣つちやつたのよ。これといふのはね詰り、あたし……。（と起き上がる）

一重　（一圖に酒の醉と解して）いゝよ、分つたよ、寢ておゐで。何んだか惡醉ひをしてゐるやうだから、凝つとして横になると好ござんすよ。

小梅　師匠、あたし何時か、それ、お前さんに云はれた事があるねえ。あの、それ……何んだ。（と這ひ寄りながら、自分にも舌のもつれるに氣がつき、眼前のクラ〳〵するに驚き）こいつ、おかしいぞ。何んだ。（兩手に疊を掴むやうにして、家内を見廻し）こ、こんなこつちや可けない。こゝが大事だ。確りしなくちやならねえ。……おや、おや、こいつは可けない。（と一箇所を睨みゐる）

一重　（驚いて）小梅さん、何うしたの。氣でも遠くなるやうな氣持ぢやないの。

小梅　變だ。變だ。こんな事アない。おや――、おや――！　確りしなくちや可けない。確り……確りしなくちや。（と自ら氣を勵まして、裾前など搔き合せる心持に見ゆる）

一重　胸氣持が惡いの、小梅さん、何うしたんだよ。

小梅、目を見張りて一點を見詰むるうちに、ウト〳〵としてそこに頽折れる。一重、初めて不安に襲はるゝもの〻如く、慌しく抱き起さんとす。

千吉、その手をとゞめる。

千吉　（苦々しげに頸を振りて）師匠、例の狂言でさ。流石に家へ這入り憎いので、また人騷せして、誤魔化さうとするんですよ。

一重　でも、それにしては樣子が何うも……。

千吉　癖になる。打遣つて置いて下さい。（と苦々しく咳く）

小梅　（むツくり起きて）師匠、あたしはね、人を殺して來たんですよ。出齒庖丁でグチヤリ……遣つちやたんだ。師匠、あたしは、庖丁！、庖丁で……遣つたんだよ。（と、そこ〻を突く眞似をする）

千吉　（聞きかねて、烟管を叩き）これ、馬鹿も大低にしないか。

一重、千吉を手にて制し小梅の態度に注意する時、格子を開いて男女大勢の聲、賑か

に入り來る。藝者五六名を連れた、銚子の大盡と呼ばるる地方の富豪者、酒に醉つて芝居より歸り來れるなり。

藝者一　（帳場に來りて挨拶）旦那。今日は有がたう。

同二　有りがたう。ほんとに面白かつたわ。

同三　旦那、有りがとう。

　　やゝ遲れて、藝者蝶次、入り來る。現在は土地の有力なる藝者となり、一座の者にも遠慮せらるゝほどの顏になれるなり。

蝶次　旦那、只今。有りがとうございました。（一重を見て）おや、お師匠さん。

一重　おゝ蝶次さん。まあ久しいぢやありませんか。お芝居ですか。

　　一重、小梅の醜態を人に見せじとして、そこにありし小搔卷を頭からスツポリと被ける。

蝶次　（小梅には心付かず）えゝ、銚子の旦那のお供を致しました。

藝者一　さ、これからが一騷ぎ。（と立ち）あら、掛行燈の灯も入れてないの。さあ皆さん、手を

貸して下さいよ。

藝者　厭な兼さんねえ。あんなに賴んで置いたのに。

　　藝者どもブツ〳〵呟きつゝ、奥座敷の方へ行く。銚子の大盡と呼ばる某、泥醉して大皷持の肩にもたれつゝ、大聲に喚めきつゝ入り來る。

銚子　兼吉、兼吉。兼公はゐないのか、兼公。

　　兼吉と聞いて、倒れゐたりし小梅、むつくり起き上がる、一重、それを抑える。

蝶次　あ、お上さんぢやありませんか。（と側に寄る）

銚子　（蝶次の手を取り）さあ、さ、何をしてゐる。みな來い、みな來い。二階で底拔け騷ぎだ。

　　銚子の大盡、蝶次の手を引張りて奥へ行く。藝者ども廊下などに初午祭の地口行燈を掛ける。舞臺の光景、急に華やかとなる。

　　二階には無性に手を叩き、兼吉を呼び立つる。

千吉　（マゴ〳〵して）はい〳〵、只今、只今。只今兼吉を見せにやります。七太郎、七、何處へ行つてゐるんだな。師匠、では私がちよつと兼吉を探して來ますから……。（と立つ）

小梅　（頭を上げ、もどかしさうに）じれつたいね、兼吉はあたしが……遣つて來たんだッてはねえ。こんなに云つてるのに……分からないのかねえ。（父に縋り、身を顫はして泣く）

千吉　えゝ、それ處かい。（と小梅を振り放し）女中は使に出したし、弱つたな。師匠、ではちよつとの間、帳場をお頼み申します。酒はこゝにありますから、お燗番を願ひます。

一重　は、好うございますとも、行つてゐらつしやい。

この間も奥の間、二階にて手が鳴り、藝者ども姿を顯はして催促することなぞあり。

一重、はい〳〵と答へつゝ、酒の用意に立つ。

小梅　（その裾に縋るやうにして）お師匠さん……お師匠さん……

小梅、云はんとして云はれぬもどかしさを手眞似にて示し、人を斬つた形をなす。

一重　（急しさに顫動して、好くも見ず）え、えゝ、分つてゐますよ。好うございます。ま、靜かにしてゐらつしやい。（と銅壺に酒の燗などする）

小梅　お師匠さん……。（泣く）

一重　分つてますよ。

千吉　（その邊をウロ〳〵して）誰か、私の羽織を知らないか、羽織だ、羽織だ。

一重　お父さん。羽織なんか何うだつて好ぢやありませんか。（二階の手に答へて）はい〳〵、はい。（と立ち働く）

千吉　あゝ然うでしたな。はゝはゝ。

千吉、苦笑ひして臺所より出掛けんとする時、人力車夫一人、顏色を變えて飛んで來る。千吉と、軒下にて逢ふ。

その間も二階。奥の間にて手が鳴る。

車夫　旦那〳〵。お宅の兼吉さんが今、大川端に切られてゐます。片息になつて蠣殼町の病院へ擔ぎ込まれるところだ。直ぐ來て下さいよ。

車夫、走り去る。

千吉　えゝそれ處かい。こつちは天手古舞ひしてゐるのだ。からかつてくれるな。

千吉、ブツ〳〵呟きながら出てゆく。小梅の兄七太郎、寄席がへりと見えて外より歸り來る。

假名屋　小梅

七太郎　（襖を開きつゝ）おい〳〵、あんなにお手が鳴つてるぢやないか。はい〳〵。お冬さん、兼吉、みな何處へ行つてゐたんだ。帳場をあけては困るぢやないか。はい〳〵。はい〳〵。

小梅、一重の裾にまつはつて離れず、泣きゐる。一重、凝つと小梅を見詰める。

七太郎　（妹を見つけて、苦い顔）お梅歸つて來たな。へん、又食ひ醉つてゐるのか。はい〳〵。

七太郎、そこにありし獨利を、自分に搬び行く。

小梅　お師匠さん、あたし遣つたのよ、遣つたのよ。兼吉を……殺したのですよ。

一重　え、お梅さん――

小梅　遣つたのよう。

小梅、出齒にて突く形をする。一重、初めて血にまびれし小梅の手を見てギョッとして立ち竦む。

七太郎、奥より戻り來る。

七太郎　（妹を睨めて）お梅。今日こそおれは、お前に云ふことがあるぞ。（料理を持ちて、又去る）

一重　（坐つて、小梅の手をとり）お梅さん、お前さん本當に……兼吉を遣つたの。

小梅、初めて安心したやうに、ガツカリと俯向く。

一重　ふう……。（太息を吐いて、小梅を見詰めゐる）

千吉、狼狽して度拍子を失ひ、開けた障子も閉めず、ウロ〳〵して歸り來る。

千吉　七太郎、七太郎〳〵。

七太郎　（又帳場に戻りつゝ）お父さん。お前、何をしてゐなさるんだよ。

千吉　七太郎、大變だ。大變なことになつた。

七太郎　え、何んです。

千吉、ベツタリとそこに坐つて、手を振りゐる。

一重　（屹つとして）お父さん。では本當にお梅さんが――？

千吉　到頭――。（兩手を組んで、聲立てゝ泣く）

七太郎　え、何んだい、お父さん。

千吉　お梅がなあ……お梅が、濱町河岸で兼吉を……出齒庖丁で、殺したのだ。河岸通りは大騷

動だ。

七太郎　えゝ……。

三人、無言、やゝ長き間。七太郎、流石にシク〳〵と泣き出す。

奥には兼吉を呼ぶ聲、聞ゆ。

一重　（思案を定めて、突と立つ）お父さん．臺所へ錠を、早く錠を下して下さい。（靜かに云つて自分は格子戸へ掛金をかけに立つ）

一重、千吉、各々戸締りして戻り來る。無言、坐る。

遠く拍子木の音、犬の聲。

銚子　（自身、梯段子を下りて來り）何うしたんだ。兼吉はゐないのか。酒は何うしたんだ。

一重　（冷靜に）はい。たゞ今持つて參ります。暫くお待ち下さいまし。

銚子の大盡、去る。

一重　（千吉を見て、靜かに）偖、何うなさいます、お父さん。

千吉　はい……。

一重　こゝは立騷ぐところぢやない、みな落付いて下さいよ。

千吉　はい……。

七太郎　師匠、何うしませう、何う致しませう。

小梅　（顏を上げ）喉が乾いた。水を下さい、水を。

一重　はい。

一重、コツプを取りて立ち上りしが、考へ直して片口より酒をなみ〳〵と注ぎ、小梅の前に持ち來る。

一重　さ、小梅さん、召上がれ。（と片口を出す）

小梅　（頸を伸して、一口飲んで）お師匠さん。酒――？（とニツコリして見上げる）

一重　（凝つと涙を怺えつゝ）さあ……どつさり呑んで下さいよ。

小梅、ドク〳〵と喉を鳴らして飲む。

一重　お梅さん、味が分かるの、おいしい……？

小梅　えゝ。（と小兒羞含むやうに笑つて、俯向く）

さきの車夫、また走り來りて臺所の戸を叩く。

車夫　兼吉さんは病院へかつぎ込む途中、蠣濱橋の上で、到頭目を落してしまひました。でも病人の體にして、病院へかつぎ込みますから、直ぐ、誰か來て下さいよ。

車夫、走り去る。

千吉　（興奮して、ソワ〳〵しつゝ）師匠、わしはこれから自首して出ます。何うせ老先のない體、娘の罪を背負つて行ければ本望だ。どうか後のところを好しくお願ひ申します。

七太郎　（何か考へゐしが、手を叩いて）お父さん。いゝ事がある〳〵。ねえ。お父さん。兼吉は全體、日頃から内々妹に惚てゐたんだ。兼吉が今夜蠣濱橋の上で、妹を無理口説きにしたうへ、手籠めにしようとしたので、據なく抵抗した。正當防禦でやつたと云へば、法律上から云つて無罪ですよ。

千吉　成程、こりや然うかも知れない。兼吉の日頃には目に餘ることも見てゐるし、手籠めにあふゆえ據なく、娘は抵抗したとは云へば理窟は立ちませう。なあ、宇治の師匠。

一重　（深く思案しつゝ）さあ、然うでございますねえ。

小梅　厭だよ、お師匠さん。（急にハツキリせる聲にて叫ぶ）

一重　あゝ、小梅さん、氣がハツキリしましたか。

小梅　（前と別の人やうに明瞭なる聲）厭ですよ、私は厭だ、たかが兼吉風情に口説かれて、出刄庖丁を持ち出さなけりや、その防ぎがつかなかつたと、人に聞かれても外聞だ。私はいやだ、そんな卑怯な眞似はしたくない。

一重　うむ、それで？

小梅　懲役に行つたらいゝんでせう。ねえ、師匠。人を殺したんだ、受けるだけのお處罰を受けたら、それで誰にも文句はないでせう。私は行くよ。懲役人に行きますよ。

一重　（嬉しさうに、手を取りて）それぢや自首して出て下さるか、小梅さん。

小梅　何故？　名乘つて出ちやいけないの。お師匠さん、名乘つて出ちやあ……不可ないのかよお師匠さん。（小兒のやうに、一重の膝をゆすぶる）

一重　あれ、泣かせておくれでない。（とハラ〳〵と泣き）お梅さん、よく決心しておくれだ。それでこそお前さん、假名屋の小梅だよ。

千吉、七太郎、兩方より縋りつくやうにして、泣く。

小梅　（凝つと千吉の顏を見詰めて、後）お父さん。お前さんには苦勞を掛け通して……あたしはやつぱり不孝者で一生を終るんですね。え勘忍して下さいよ。あたしは何うで生れ損ひ……世間樣から見れば出來そこないなんだ。

千吉、小梅を指差してたゞ泣く。

藝者蝶次、奥の間より走り來り、小梅に抱きつく。

蝶次　姉さん、小梅姉さん。飛んだ事に、なりましたね。

小梅　えゝ、蝶次さんか――。

この時、戸外にガヤ〳〵と人聲して、表口と臺所口の戸を激しく叩き立てる。

表口の聲　旦那〳〵。醉月さん〳〵。

裏口の聲　旦那〳〵。

千吉　（狼狽して家内をウロ〳〵）はい〳〵、はい。

一重　はい。只今開けます、只今――。

一重、戸外に答へつゝ、目くばせにて小梅に決心を迫る。小梅、ニツコリして立ち上る。

小梅　ど、それぢや行かう。お師匠さん、切火を打つて下さい、身を淨めて行きたい。

一重　はい。（立つ）

小梅、格子の外へ歩みかけて膝頭に力なく、よろ〳〵と蹌めく。

蝶次、あれ、姉さん、危なうござんすよ。

蝶次、小梅をさゝゆる、その顏を小梅、凝つと見る。一重、燧石をもつて小梅のうしろへ廻る。

小梅　蝶次さん、そして太夫さんの、この頃の舞臺は……？

蝶次　皆樣のお力で……まるで別人のやうに舞臺が冴えて來たと、内輪の人さへ驚いてゐると聞きました。

表と裏に戸を叩く音、又激しく聞ゆる。

小梅　それはまあ……（喜ばしげにホロリとして）何うか太夫さんにも……お前さんから好しく云

つておくんなさいよ。

蝶次　は……い。

小梅、泣き入る蝶次を振り拂つて、歩み出す。又、蹌めく。

一重　（燧石を鳴らしつゝ）さ、小梅さん、切火だよ。

小梅　（蹌めく足を踏みしめて）何アに、大丈夫――。あたしも小梅だ。

小梅、急に元氣らしく微笑の聲を洩して、切火を身にうけ、一同の見送るなかを警察署へと歩み出す。

――幕――

附記

この脚本は數年前新富座に於て、伊原青々園氏の原作小説を脚色して、喜多村錄郎、河合武雄兩君一座のために、上演脚本として起稿したものであります。その當時にありても原作者の諒解を得て、極めて自由大膽なる脚色を試みたのですが、こたび校訂定本をつくるために全部に改竄を加へ、殆んど新しく創作するほどの勞力をもつて改訂に從事しましたから、或は原作に悖れる點も多々あることと思ひますが、その點は切に原作者ならびに讀者諸彦の寛恕を俟ちます。

假名屋小梅

昭和二年十二月十五日印刷
昭和二年十二月二十日發行

〔定價金二圓五十錢〕

著者　眞山青果

發行人　東京市牛込區肴町一二　涌島義博

印刷人　東京市外下戸塚二四〇　內田廣藏

印刷所　東京市外下戸塚二四〇　內田印刷所

南京圖書館

圖書目錄
無代進呈

東京市牛込區神樂坂
南宋書院
電話牛込一四六一番
振替口座東京七五三二八番

コ1476

南宋書院文藝書類

佐藤春夫著　**佐藤春夫十年集**　定價二圓二十錢　送料十二錢

眞山青果著　**明君行狀記**（戲曲集）　定價一圓五十錢　送料十錢

正宗白鳥著　**勝敗**（戲曲集）　定價一圓二十錢　送料十錢

エレサーエフ著　袋一平譯　**醫者の記錄**　定價一圓五十錢　送料十二錢

アラン・ポオ著　龍膽寺旻譯　**タルヱフ博士の治療法**　定價二圓　送料十二錢

ホフマン著　石川道夫譯　**黃金寶壺**　定價一圓五十錢　送料十二錢

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black